

ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」 備忘

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7149

ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」備忘

山本 一

「少年の日の思い出」は第二次大戦後の多くの国語教科書に採用され、現在も光村図書の中学一年の教科書に掲載されている小品である。私の専門分野とはまったく異なるものであるが、最近この教材をいささか検討する機会があったので、その際に考えたことを記しておきたい。

この作品にはヴァリアントがある。

一九一一年に発表された初稿の表題は、*Das Nachpflaenauge* で、これは、作中の回想譚の語り手がエーミールから盗んで壊してしまう珍しい蛾（ドイツ語では蝶と蛾は明確に区分されない）のドイツ語種名である。この初稿は、後にミヒエルス Volker Michels が編集したヘッセの蝶・蛾にかかわる図版入りの詩文集『蝶』*Hermann Hesse Schmetterlinge* に収められた。

この本は一九八四年に岡田朝雄氏の訳により朝日出版社から出版され、後一九九二年に岩波書店の「同時代ライブラリー」に加えられた。原書の方も *Isid Taschenbuch 2324* として入手できるので、原文・日本語訳とも参照できる。岡田氏は右の『蝶』の解説で、

この小品は『小さな庭』*Kleiner Garten* 1919 に収められている。全集には収録されていないが、ヘッセ自身この作品には特に愛着があったようで、一九三一年、全体に手を加え、題名も *Jugendgedenken* と改めてドイツの新聞 *Würzburger General-Anzeiger* に発表している。高橋健二訳『少年の日の思い出』がそれである。

と、改稿の経緯を説明し、さらに高橋健二氏がヘッセ自身から新聞の切り抜きを渡されたエピソードを引用している。その高橋氏は、はやく一九四〇年（昭和十五年）に新潮社から出た『放浪と懐旧』と題するヘッセのアンソロジーに、この作品を訳して収録していて、その「あとがき」には「手づから訳者に与へた新聞の切り抜きを訳したものである」と明記されている。同じ訳者によつて、戦後、新潮社から出た『ヘッセ全集』第二巻（一九八二年）などにも収められている。また同氏編によるドイツ語版（大学などの語学テキスト）『少年の日の思い出』（郁文堂 1955）も出版されている。ただし、新潮社全集の解題や郁文堂版「あとがき」には、『小さな庭』所収稿との題の異同には触れているが、内容の改稿については言及していない。したがつて、本来ならば初出雑誌、『小さな庭』、新聞「ヴェルツブルガー・ゲネラル・アンツァイガー」それぞれの原本を参照して、翻訳の依拠原文と再三の改訳の異同との関係を確認する必要があるが、いまはそこまでの作業をする準備がない。前掲の岡田氏の解説に述べるように、旧版のドイツ語全集には未収録であったが、ドイツで新版の全集が今年完結し（Garrliche Verlag 前出のミヒエルの編集）、日本でも新しい全集の刊行が始まっているので（臨川書店刊）、専門家によつて説明されることであらう。

ここでは、容易にアクセスできる前掲の書物によつて、初稿と改稿を比較しておく。

冒頭に紹介される語り手は、改稿では単に「私の客」とあるのが、初稿では「私の客で友人のハインリヒ・モーア」と固有名詞で出る。しかしこの目立つ異同にもかかわらず、冒頭の一文は、この紹介の仕方のちがいで、**「夕べの散歩」**が二語であらわされるか**「単語か」という点**、それに**「コンマひとつの有無」という、微細な異同しか持つておらず、センテンスの構造に変化はない**。ここだけでなく、両稿はほとんど文レベル、さらに文の中の単語の配列レベルで照らし合わせることができ、（私どもがふだん説話の比較の際などに使っている用語で言えば）**「同文関係」**にある。つまり、両稿は改作の関係にはなく、あくまで同一作品の異稿に過ぎないことは明らかである。

ただ、そのなかにあつて、エーミールがクジャクヤママユを手に入れた（初稿では捕らえた、改稿ではサナギから羽化させた）ことを聞いた主人公の反応の部分は、注意を引く。岡田氏の訳で初稿を引用する。

こんな不思議な蛾をあの退屈なエーミールが持つているなんて！ これを聞いたとき、ぼくはまず最初の瞬間、ついにこの珍しい蛾にお目にかかれるというよろこびと、それ

に對する燃えるような好奇心しか感じなかった。それからもちろんねたましい氣持が起つてきた。そしてよりよつてあのおもしろくないあらさがし屋がこんな神秘的なすばらしい蛾を採ることになるなんて穢らわしいことだと思えてきた。そのためぼくは、はやる氣持をおさえ、彼に敬意を表しに出かけて行つてその獲物を見せてもらいたいのを我慢していた。しかし、そのことがどうしても頭からはなれなかった。そこで次の日、学校でその噂を確かめると、やはりすぐ出かけていこうと決心した。

主人公のこの屈折した心理と逡巡は、原文でも五センチンスからなる一パラグラフを費やしている。ところが、改稿では、「エーミールがこの不思議なちやうをもっているということを知ると、僕は、それが見られるときのくるのが待ちきれなくなつた」(光村圖書『國語1』による)と訳される、わずかにセンチンスにまとめられ、「食後に」ではじまる次の文と同じパラグラフに組み入れられている。若干の共通の語彙はあるものの、他の部分のように文レベルの対応關係が認められないまでに改変されている。この改訂は、(もし単に新聞記事の字数制限のためでないとすれば)どのような意味を持つのだろうか。

言うまでもなく、初稿では、エーミールへの主人公の反感、

憎惡、そして嫉妬が具体的に描かれている。「妬み Zelos」「憎む Hater」は、先にエーミールを紹介した際にすでにあらわれている表現であるが、だからといって、上記の部分の削除が単なる重複の整理であるとは言えない。ほかならぬクジャクヤマユに関して、主人公はその高貴な獲物がエーミールのような人間にふさわしくないという価値判断を、Langewald (退屈な奴)、Nops (不平家)、shode (輕蔑されるべき)といったかなり露骨な言葉で述べているからである。この箇所は、すぐあとの主人公の盗みの潜在的な動機を明かし、その伏線となっている。エーミールがクジャクヤマユを所有しているのは不当だという感情が、採集の際と同様の占有への情熱と重なつて、標本を盗ませる。なるほど、盗みの場面での主人公は、右の箇所で述べたような価値判断を持ち出して、自分の行為を正当化したりはしていないし、そもそも前に考えたことを思い出してもいない。けれども読者の側からすれば、この箇所があることでその後の主人公の行為への感情移入が容易になる。盗みの行為だけでなく、母親に命じられながらも謝罪に逡巡し、エーミールに輕蔑されてほとんど逆上しそうになること、さらにエーミールが「世界秩序」の代表のように立っているというやや大げさな感じ方なども、より唐突でなく了解されるはずである。

これに関連して、小さな異同ではあるが、先立つ箇所の主人

公の両親が標本箱を買ってくれないという叙述で、初稿には両親が「貧しい」とはつきりあることも注意される。エーミールは単に模範少年であるだけではなく、おそらく当時のドイツにおいて一定の社会的・経済的地位の家に育った「教師の息子」であり、自分の個室とこぎれいな標本箱を持っている恵まれた子供であり、いわば支配的な階層の家庭に育っている。そういう彼に対して主人公は憎悪や反抗心とともに劣等感も感じている。こうした少年の日常的な心の動きは、初稿においては改稿よりはるかによく理解できる。

それならば改稿された形は何なのか。

ここでは、日常的な心の動きはたどりにくい。エーミールへの憎悪と嫉妬、そして彼の属する世界から疎外されているという感情、これらは日常生活での感じ方としては十分説得的に描かれていないように思われる。その分、主人公とエーミールとの関係は、ノイズを省いて、本質の部分だけを取り出し、いわば象徴的に描かれていると言えるかも知れない。それを芸術的な完成と考える見方は当然あり得る。しかしその半面では、それは「ヘッセの世界」の参照を読者に要求しているとも言えるであろう。ヘッセの小説を読んできた読者なら（『車輪の下』『ゲルトルート』の後の一九二一年ではなく、『荒野の狼』『ナルチスとゴルトムント』の後の一九三一年の読者ならたぶんな

おさら）、主人公の「反秩序」的な情熱、憎悪、反抗、挫折と疎外感、いわばすっかりおなじみの、懐かしい世界であり、くどくどしい説明は不用であろう（ヴェルツブルグの新聞の購読者がみなヘッセの愛読者であったかどうかは、もちろん別問題であるが）。おそらく作品の純化とか自立とか言われるものは、何らかの意味でこうした「訓練された」読者を前提としている。ある意味では「文学性」とはそういうものなのであろう。

つぎにヴァリアントの問題から離れ、この小品が何を描いているのかを考えたい。

最後にエーミールに軽蔑され、怒りを抑えて戻ってくる時の主人公の心に浮かぶ、「一度起こってしまったことは、取り返しつかない」という考え（だめにする *was oben*）は改稿で「起る *erheben*」という動詞に入れ換えられた¹は、何を意味するのだろうか。「盗み」のような「悪事」をしたら、謝つてもとりかえしはつかないというのか？ そうではないだろう。エーミールが和解を受け入れたら、または怒り狂って主人公を罵つたら、ことがらは子供のトラブルとして済んだのである。母親は、明らかにそうした「子供のトラブル」としての解決策を主人公に示唆したのである。事態がそのように進まなかったのは、エーミールの子供としては特異な性格によることで、

「盗みという悪事」そのものが、「取り返しがつかない」というのとはすこし違う。つまりこの話を、「悪事」に対する「罰」の物語というふうに一般化することは必ずしもできない。

さらに、エーミールは主人公の親友ではなく、彼らはもとも深い友情や信頼で結ばれていたわけではない。つまりこの話は、裏切りや過ちによって、かけがえのない友情が崩れ去るという物語でもない。

それではいったい何が、どのように「起こってしまった」のか。

もうどうしようもない、ぼくは悪党 (Gangster) であり、ずっとそのままだし、エーミールは冷然と、軽蔑するような正義の中に立って、ぼくに対して、まるで、世界秩序 (Weltordnung) のように。(この箇所改稿による異同はないが、両氏の訳文は当然かなり異なるので、あえて私の稚拙な直訳で示しておく)

この叙述は、少年がエーミールの態度にどのくらい大きく衝撃を受けたかを物語っている。けれども、それにしてもすこし大げさすぎないか？ クジャクヤママユが実際にどのような価値のものであれ、他人の大切な品を盗んだり壊したりすれば犯罪

だと言え、それまでであるが、しかしほんとうに問題なのは、その「犯罪」なのだろうか。

ここで思い出しておきたいのは、この物語は、既に成人した主人公が、友人である「私」によって語られているという点である。右の箇所における少年の衝撃は、単にその場でそう感じたというだけの、一過性のものではなく、成人後の私によって確認されているのである。したがってもちろん、この後、少年が自分のコレクションをすべて壊して捨ててしまったことも、一時の感情に駆られた一過性のことではない。もちろん成人後の主人公も、「あのときは早まったことをしたな」などとその廃棄を後悔しているのではない。それどころか何とこの主人公は、いまなお他人の蝶の蒐集に触れるだけで苦痛を感じているのであり、また、少年時代の蝶に対するような情熱が、大人になつてからの自分にはもう戻つてこなかったとも述べている。この大げさは、ヘッセの諸作品の主人公 (あるいはそれを分身としているヘッセ自身) の持つている、社会の秩序に対する、アンビバレントで、過剰な反応を参照すれば、それなりに理解できるであろうが、この作品の中だけではたぶんすこし理解しがたいものである。

とはいえ、作品の読み方としては、ここから逆に次のように結論できるかもしれない。成人した主人公にとって決定的な意

味を持ちつづけたからこそ、少年がエーミールの軽蔑から受けた衝撃は重大だったのだ、と。この事件で主人公は変わったのである。何かが、決定的に失われ、永久に戻ってこなかった。「何か」をどうしても言葉で言えというなら、やはり少年時代に固有の、夢であり、情熱であり、いくぶんの軽率さとともに追求される自己満足ということであろう。エーミールの軽蔑は、それらすべてが、じつは取るに足りない、みすばらしいものにすぎなかったと主人公に告げたのである。エーミールが「世界秩序」の代表であつたのではなく、この時、「世界秩序」がエーミールの姿を借りて主人公の前に現れ、主人公の少年らしい価値の世界をすっかり打ち砕いてしまつたのである。主人公の盗みやエーミールの軽蔑は、ひとつのきつかけであつたに過ぎない。いずれ、大人になる途上のどこかで、なんらかのかたちでそれはやってくる事態であつた。

もちろん、子供時代の心をそのまま持つて成人できる幸福な人もいるであろう。この作品の冒頭で、主人公に蝶の蒐集を見せて語りを引き出す「私」は、子供を持ったことで少年時代の情熱が戻ってきたと語っているから、そのような幸福なタイプのようにも見える。そして作者ヘッセは、一九〇四年、「居間と書斎からは湖の壮大な眺望が楽しめる」（ラルフ・フリードマン『評伝ヘルマン・ヘッセ―危機の巡礼者』藤川茂郎訳草

思社二〇〇四年）ガイエンホーフエンの家でマリーアとの結婚生活をはじめ、翌年に長男、〇九年に次男、さらに後に三男も生まれた。しかし、よく知られているように、家庭生活は安定したものではなかった。「少年の日の思い出」の父親である「私」は、作者の生活の一部の投影ではあるが、作者の似姿ではないだろう（ただし、ヘッセ自身は成人後も蝶蒐集の情熱は持ち続けた。一方の、「客」は、どういう職業についているともわからないが、「リヴィウスの本」などを引き合いに出していることから強いて推測すれば、教師かも知れない（とすればいくぶん皮肉なことであるが）。いずれにせよ、「私」が自由な芸術家気質に生きていたとすれば、客はやや堅苦しい「世界秩序」に属して生きているのであらうと、漠然とながら感じ取ることではある。作者は、そうした作家自身の二面性、ひいては人間の精神の二面性を、「私」と「客」に割り振っているのかもしれない。誰でも大人のなかに子供を残しているとはいえず、また誰でも多かれ少なかれ子供時代との訣別を経験しているからである。

この物語は（もし一般化しなければならないなら）、少年時代の喪失、幻滅と、苦い現実の到来の物語である、というのが、五十歳を越えた私による読み取りなのであるが、別の世代の読者は別のようにも読むことであらう。初稿を書いた頃のヘッセ

(二十代半ば)と近い年齢の人、また作中の少年に近い年齢の人はどうだろうか。ぜひ尋ねてみたいものである。

※田中実／須貝千里編『文学の力×教材の力 中学校編1』
(教育出版二〇〇一年) 所収の綾目広治氏、竹内常一氏の

論文・「所感交感」を参考とした。また、一五年度・一六年度の本学教育学研究科院生、日向正志氏、松田岳志氏との意見交換から示唆を得た点がある。記して感謝したい。

(本学教員)

*語学・文学研究執筆要項

印刷様式(1頁。28字×22行×2段Ⅱ1232字)に合わせて要項を次のようにいたしました。

一、研究論文・実践記録の枚数上限は400字詰め29枚(11600字)。図版・表等は頁の何分の一を専有するかにより字数に換算して枚数に含める(上記の式によって、計算して下さい。例えば半頁分では616字です。なお、地図・グラフ・生徒作品現物などを縮小して掲載する場合は、縮小し過ぎると判読できなくなります。必ず大き目に考えて下さい)。

ワープロ原稿の場合は、できれば28字、22行でプリントする。なるべくフロッピー(できればMS-DOSテキストファイルに保存したもの)を添えて下さい。

二、原稿の末尾に、現職(勤務校名・会社名など)および卒業生・修了生の場合は卒業(修了)年(年度ではなく実際の年)を記して下さい。

四、×切は毎年6月末日。送り先は、金沢大学教育学部国語教室内「語学文学研究」編集委員会。「国語国文学の広場」への原稿は、封筒表に「広場原稿」と朱書のこと。なお、研究論文、実践記録の場合は、編集の都合上、前年末までに執筆希望を編集委員会までお知らせ頂けると幸いです。

*研究論文・実践記録は、国語学・国文学・漢文学・国語教育・書・書道教育などに関するものとします。「国語国文学会の広場」は内容自由です。